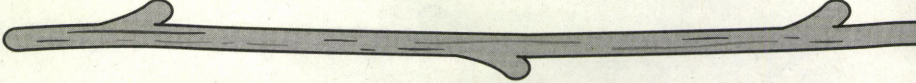


守られる赤ちゃん

前原 寛

子どもたちの生活は、園全体に広がっています。「園生活」という言葉は、園全体が子どもの生活の場であるということを意味していますから、生活の拠点から展開される子どもの活動はオープンな広がりをもつことが必要です。保育者主導の意識が強いと室内での活動が多くなり、子どもの行動範囲は狭くなっていきます。これでは「保育室生活」であり、「園生活」とは呼べなくなります。私のかかわっている保育園では、空間の区切りが子どもの動きの妨げにならないように意識しています。

かといって、子どもがどこでも自由に入り込んでいいわけではありません。

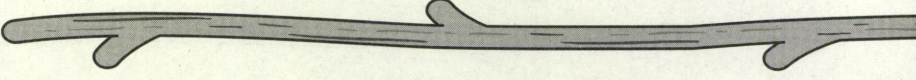


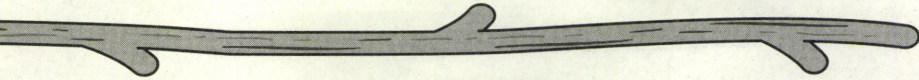
子どもが入れない場所は園内にも当然あります。たとえば調理室は、衛生管理や食中毒対策という点から、担当者以外は大人であっても入室が制限される場合もあります。

このように子どもの出入りが制限される場所は幾つありますが、その一つに乳児室があります。乳児は幼児と違い、起床と睡眠を繰り返す生活リズムをもっています。ですから、乳児室では一日を通して誰かが寝ていることになり、その部屋に大きな子どもたちが無造作に出入りしたり遊んだりすることは困ります。

乳児室を赤ちゃんの守られる場にするために、保育園によっていろいろな工夫がなされています。よく見受けられるのは、仕切りを作ることです。通常のドアだけでなく、低い柵を設けたり、簡単なロックのかかる仕切りを設けたりして出入りを制限し、乳児室で生活している赤ちゃんが守られるようになっていきます。

私のかかわっている保育園は、乳児と一歳児が同じ保育室で生活しています。「もも組」と呼んでいます。その入り口には仕切りを設けていません。もも組の部屋はリズム室に接しています。二つの部屋の間の扉は強化ガラスをはめ込んだ引き戸です。保育中は鍵をかけませんので、誰でも開け閉めできます。



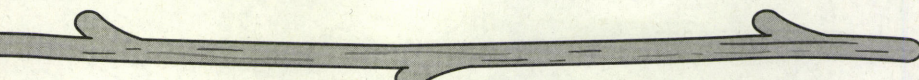


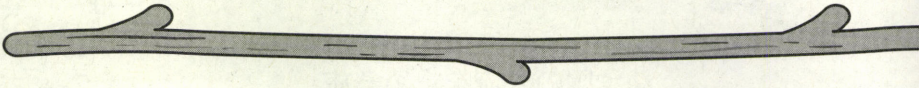
もも組でも月齢の高い子どもたちは、自分で開け閉めして出入りしています。もも組の入り口に柵などの仕切りがないのは、当園の子どもたちは、もも組に入らないからです。もも組に面しているリズム室でどれだけ遊んでいても、その子たちが入ってくることはありません。

子どものオープンな動きを尊重する保育をしていますから、異年齢の交流は活発に展開しています。上の年齢の子どもが、もも組の子とかかわって遊んでいる姿もよく見られます。しかし、一緒に遊んでいるもも組の子が自分の保育室に戻ると、上の子どもたちは入り口のところで立ち止まり、決してその中に入ろうとしません。

保育者が、子どもの出入りを禁止しているわけではありません。何も指示しなくても、二歳児以上の子どもは、もも組に入らないのです。まれに新入園児が入り込むことがありますが、その時は在園の四、五歳児が「もも組に入ったらいけないよ」と教えてくれています。

おそらく子どもたちは、乳児とかかわる保育者の姿を通して、もも組の保育室が守られなければならない場であることを認識しているでしょう。なぜなら、もも組に入っただけでいいという制限は、保育者の提案したものではなく、子どもが生活をつくる中で現れてきた自発的な制限だからです。つまり、子ども





もたち自身が、赤ちゃんを守るということを理解して自分たちの行動を制御しているのです。

当園では、もも組から五歳児の保育室まで、5つの部屋と一つのリズム室があります。どの保育室もオープンであり、遊びにおいて子どもへの出入りは制限されていません。二歳児の部屋で四歳児が遊んでいることもあれば、五歳児の部屋に一歳児がいることもあります。その時々々の活動や状況によって変化します。しかし、もも組の部屋だけは、それ以外の子どもがいることはありません。そこはいつでも絶対的に守られる場所になっているのです。

この連載では、何らかの創意工夫をしていることを取り上げつつ、保育の考え方を展開してきました。今月は、乳児室への出入りを制限するような物理的な工夫をしていないことを取り上げました。しかしそれは何もしていないことを意味しません。物理的な工夫はなくとも、子ども自身の行動が工夫の現れになっています。保育者の子どもへの信頼によって成り立つ創意工夫が、そこにはあるのです。

(鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長)